

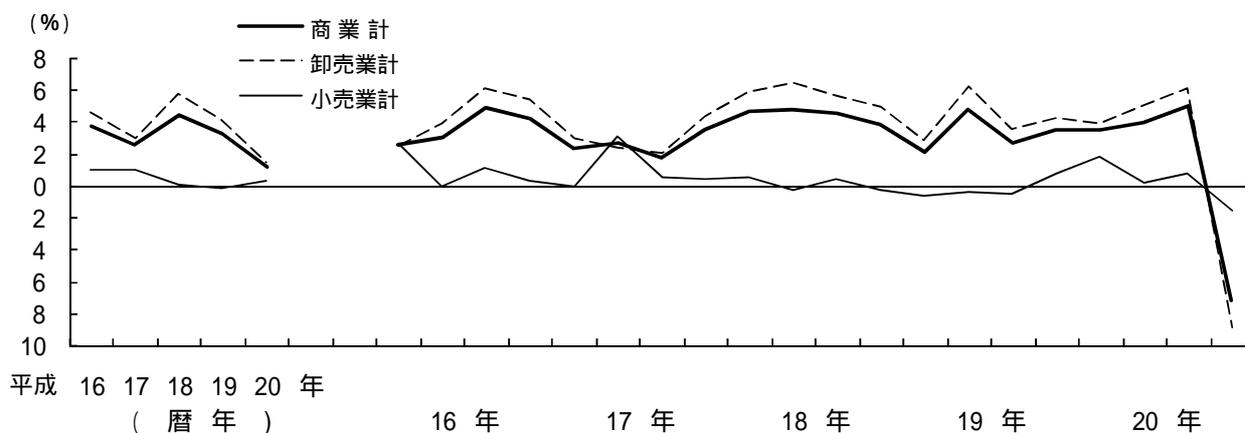
# 概況

## ・商業販売額の動向

### - 6年連続の増加となった商業販売額 -

平成20年の商業販売額は、621兆810億円、前年比1.2%と6年連続の増加となった(第1図)。四半期別にみると、1～3月期は前年同期比3.5%と18期連続の増加となった。4～6月期は同4.0%、7～9月期は同5.0%、10～12月期は同7.1%と21期ぶりの減少となった。

第1図 商業販売額の推移(前年比・前年同期比)



## ・卸売業販売額の動向

### - 6年連続の増加となった卸売業 -

平成20年の卸売業販売額は、農畜産物・水産物卸売業、衣服・身の回り品卸売業などが減少したものの、鉱物・金属材料卸売業、各種商品卸売業などが増加したことにより、485兆6040億円、前年比1.5%と6年連続の増加となった(第2図)。これは、農畜産物・水産物卸売業が水産物や輸入野菜の取扱い減などにより減少となったものの、鉱物・金属材料卸売業が、原油高の影響や鉄鋼などの価格高に加え、内外需とも好調だったことなどにより増加、各種商品卸売業が、輸出が減少したものの、原油などの輸入増などにより増加、機械器具卸売業が、自動車は米国や欧州向けなどの輸出が不調だったものの、薄型テレビや電気冷蔵庫、輸出向けの重電機器などが好調だったことなどにより増加したことなどによる。

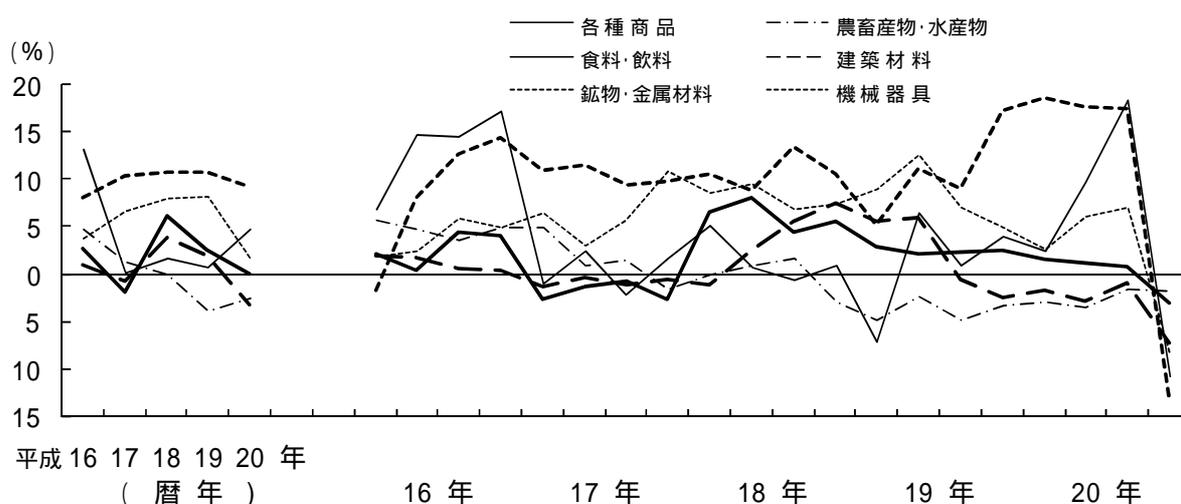
四半期別にみると、1～3月期は、農畜産物・水産物卸売業などが減少したものの、鉱物・金属材料卸売業や機械器具卸売業などが増加したことにより、122兆200億円、前年同期比3.9%と18期連続の増加となった。

4～6月期は、農畜産物・水産物卸売業などが減少したものの、鉱物・金属材料卸売業や機械器具卸売業などが増加したことにより、122兆8380億円、同5.1%の増加となった。

7～9月期は、農畜産物・水産物卸売業などが減少したものの、鉱物・金属材料卸売業や各種商品卸売業などが増加したことにより、126兆190億円、同6.2%の増加となった。

10～12月期は、機械器具卸売業、鉱物・金属材料卸売業、各種商品卸売業をはじめ、その他の機械器具卸売業を除くすべての業種が減少したことなどにより、114兆7270億円、同8.7%の減少となった。

第2図 主要卸売業販売額の推移（前年比・前年同期比）



### 1. 業種別の動向

各種商品卸売業は、輸出が減少したものの、原油価格の上昇に加え、原油や液化天然ガスなどの輸入が増加したことなどにより、58兆5300億円、前年比4.8%と6年連続の増加となった。

四半期別にみると、1～3月期は、原油高の影響などにより、前年同期比2.6%と4期連続の増加となった。4～6月期は、原油高の影響に加え、原油や液化天然ガスなどの輸入が増加したことなどにより、同9.7%の増加となった。7～9月期は、原油高の影響に加え、原油や液化天然ガス、石炭などの輸入が増加したことなどにより、同18.4%の増加となった。10～12月期は、年後半における原油価格の低下に加え、輸出の取扱量の減少により、同10.7%の減少となった。

繊維品卸売業は、国内向けの需要低迷が続いていることにより、3兆7490億円、前年比9.6%と18年連続の減少となった。

四半期別にみると、1～3月期は、国内向けの需要低迷が続いていることにより、前年同期比5.8%と4期連続の減少となった。4～6月期は、同6.5%の減少となった。7～9月期は、同10.8%の減少となった。10～12月期は、引き続き国内向けの需要低迷が続いていることにより、同15.6%の減少となった。

衣服・身の回り品卸売業は、天候不順の影響などから季節衣料が低調な動きだったことなどにより、12兆2270億円、前年比7.1%と2年連続の減少となった。

四半期別にみると、1～3月期は、天候不順による春物商材の動きが鈍かったことなどにより、前年同期比3.1%と6期連続の減少となった。4～6月期は、天候不順による夏物商材の動きが鈍かったことなどにより、同3.4%の減少となった。7～9月期は、天候不順による夏・秋物商材の動きが鈍かったことなどにより、同5.1%の減少となった。10～12月期は、天候不順の影響などから季節衣料の動きが鈍かったことなどにより、同16.4%の減少となった。

農畜産物・水産物卸売業は、水産物や輸入野菜の取扱量の減少などにより、41兆6900億円、前年比2.5%と3年連続の減少となった。

四半期別にみると、1～3月期は、水産物や米の取扱量の減少に加え、輸入野菜の取扱量の減少などにより、前年同期比3.0%と6期連続の減少となった。4～6月期は、水産物の取扱量の減少に加え、輸入野菜や果物の取扱量の減少などにより、同3.5%の減少となった。7～9月期は、穀物類などの取扱い量が増加したものの、水産物や輸入野菜、果物などの取扱い量が減少したことなどにより、同1.6%の減少となった。10～12月期は、引き続き水産物や輸入野菜の取扱量の減少などにより、同1.9%の減少となった。

食料・飲料卸売業は、ビールなどアルコール飲料の動きが鈍かったものの、調味料や加工食品などが堅調だったことなどにより、47兆9790億円、前年比0.1%と3年連続の増加となった。

四半期別にみると、1～3月期は、外食産業向けなど業務用食材や飲料が好調だったことなどにより、前年同期比1.6%と9期連続の増加となった。4～6月期、7～9月期は、調味料などが好調だったことなどにより、それぞれ同1.3%、同0.9%の増加となった。10～12月期は、ビールなど飲料の取扱量の減少などにより、同3.0%と12期ぶりの減少となった。

建築材料卸売業は、年前半における改正建築基準法施行に伴う審査の遅れなどの影響に加え、建築需要の減少などにより、24兆540億円、前年比3.2%と3年ぶりの減少となった。

四半期別にみると、1～3月期は、改正建築基準法施行に伴う審査の遅れなどの影響により、前年同期比1.7%と3期連続の減少となった。4～6月期は、改正建築基準法施行に伴う審査の遅れなどの影響に加え、建築需要の減少により、同2.9%の減少となった。7～9月期、10～12月期は、建築需要の低迷などにより、それぞれ同0.9%、同7.2%の減少となった。

化学製品卸売業は、ナフサなど原料の高騰による製品価格の上昇に加え、輸入が増加したことなどにより、25兆5290億円、前年比1.8%と6年連続の増加となった。

四半期別にみると、原料高による製品の価格高などにより、1～3月期は、前年同期比7.6%と21期連続の増加、4～6月期、7～9月期は、それぞれ同5.7%、同6.5%の増加となった。10～12月期は、原料価格の低下に加え、輸出の取扱量が減少したことなどにより、同11.7%と24期ぶりの減少となった。

鉱物・金属材料卸売業は、原油価格の高騰による原油や石油製品の取扱高の増加、鉄鋼などの価格上昇に加え、内外需ともに好調だったことにより、65兆8270億円、前年比9.2%と5年連続の増加となった。

四半期別にみると、1～3月期は、原油や鉄鋼などの価格高に加え、内外需ともに好調だったことにより、前年同期比18.6%と16期連続の増加となった。4～6月期、7～9月期は、原油や鉄鋼などの価格高に加え、輸出入が好調だったことにより、それぞれ同17.6%、同17.4%の増加となった。10～12月期は、原油などの輸入減に加え、非鉄金属などが輸出入ともに不調だったことにより、同13.2%と19期ぶりの減少となった。

機械器具卸売業は、一般機械器具が輸出向けの原動機などが不調だったこと、自動車も米国や欧州向けなどの輸出が不調だったことなどによりそれぞれ減少したものの、電気機械器具が国内向けの薄型テレビや電気冷蔵庫、輸出向けの重電機器などが好調だったことなどにより、129兆4670億円、前年比1.7%と6年連続の増加となった。

四半期別にみると、1～3月期は、電気機械器具が薄型テレビなどのデジタル家電や通信機器などが好調、一般機械器具が建設用・鉱山用機械、原動機などの輸出向けが好調だったことに加え、自動車も中近東、アジア向けが好調だったことなどにより、前年同期比2.7%と19期連続の増加となった。4～6月期は、電気機械器具が薄型テレビなどのデジタル家電や半導体等電子部品などが好調だったことに加え、一般機械器具が建設用・鉱山用機械、金属加工機械などの輸出向けが好調だったことなどにより、同6.1%の増加となった。7～9月期は、一般機械器具が輸出向けの原動機などが低調だったことに加え、自動車も低調だったものの、電気機械器具が薄型テレビなどのデジタル家電や重電機器などが好調だったことなどにより、同7.0%の増加となった。10～12月期は、一般機械器具が輸出向けの原動機などが不調、電気機械器具が輸出向けの半導体等電子部品などが不調、自動車も引き続き米国や欧州向けなどの輸出が不調だったことなどにより、同8.5%と22期ぶりの減少となった。

家具・建具・じゅう器卸売業は、建築需要の低迷に加え、住宅設備、室内装飾品などの需要が減少したことなどにより、7兆9000億円、前年比6.0%と3年ぶりの減少となった。

四半期別にみると、改正建築基準法施行に伴う審査の遅れなどの影響により、1～3月期は、前年同期比2.0%と10期ぶりの減少、4～6月期は、同3.7%の減少となった。7～9月期、10～12月期は、建築需要の低迷による住宅設備や室内装飾品などの減少などにより、それぞれ同5.4%、同12.6%の減少となった。

医薬品・化粧品卸売業は、化粧品の堅調な動きに加え、医薬品が医療機関向け治療薬などが堅調だったことにより、25兆7230億円、前年比2.3%と8年連続の増加となった。

四半期別にみると、1～3月期は、引き続き化粧品や風邪薬、花粉症対策関連の医薬品が好調だったことにより、前年同期比3.6%と22期連続の増加となった。4～6月期、7～9月期は、引き続き化粧品及び医薬品が好調だったことにより、それぞれ同3.8%、同4.2%の増加となった。10～12月期は、医療用医薬品の国内取引が低調だったことなどにより、同1.9%と25期ぶりの減少となった。

その他の卸売業は、年後半において紙・板紙の国内向け取扱量が減少したことなどにより、42兆9290億円、前年比1.8%と6年ぶりの減少となった。

四半期別にみると、1～3月期は、たばこやタイヤなどのゴム製品が好調だったことなどにより、前年同期比4.6%と12期連続の増加となった。4～6月期は、紙・板紙などの料金改定に伴う駆け込み需要の影響や輸出の増加などにより、同3.3%の増加となった。7～9月期、10～12月期は、紙・板紙の国内向け取扱量が減少したことなどにより、それぞれ同1.1%、同13.2%の減少となった。

## 2. 大規模卸売店の動向

大規模卸売店の販売額は、128兆5382億円、前年比1.1%と5年連続の増加となった。

これは、石油・石炭、鉄鋼などの素材関連の価格上昇に加え、輸入が好調だったことによる。

販売額を商品別にみると、その他の機械器具、家庭用電気機械器具などが減少したものの、石油・石炭、鉄鋼及び農畜産物・水産物などが増加となった。

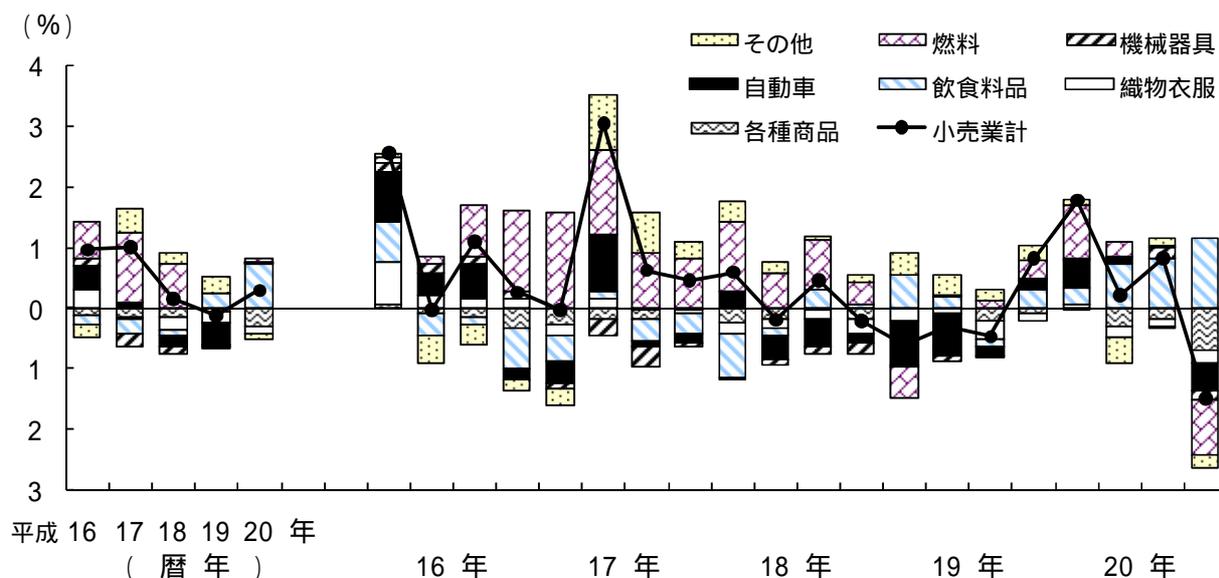
四半期別にみると、1～3月期は、一般機械器具、その他の商品などが減少したものの、石油・石炭、鉄鋼、自動車、化学製品などが増加したことにより、前年同期比2.7%と16期連続の増加となった。4～6月期は、その他の輸送用機械器具、家庭用電気機械器具などが減少したものの、石油・石炭、鉄鋼、自動車、化学製品などが増加したことにより、同5.6%の増加となった。7～9月期は、その他の機械器具、家庭用電気機械器具、自動車などが減少したものの、石油・石炭、鉄鋼、一般機械器具、化学製品などが増加したことにより、同8.7%の増加となった。10～12月期は、農畜産物・水産物や鉄鋼などが増加したものの、その他の機械器具、化学製品及び自動車などが減少したことにより、同11.7%と19期ぶりの減少となった。

## ・ 小売業販売額の動向

### - 2年ぶりに増加となった小売業販売額 -

平成20年の小売業販売額は、各種商品小売業、織物・衣服・身の回り品小売業などが減少したものの、飲食料品小売業、燃料小売業、自動車小売業、機械器具小売業が増加したことにより、135兆4770億円、前年比0.3%と2年ぶりの増加となった。これは、各種商品小売業、織物・衣服・身の回り品小売業がともに天候不順などから季節衣料の伸び悩みなどにより減少したものの、飲食料品小売業が畜産品などの伸びなどにより増加、燃料小売業が前半の原油価格の上昇による石油製品価格の値上がりなどにより増加、自動車小売業が前半まで普通乗用車などが好調だったことなどにより増加、機械器具小売業が薄型テレビや電気冷蔵庫などが好調だったことなどにより増加したことによる。

第3図 小売業業種別寄与度の推移（前年比・前年同期比）



四半期別にみると（第3図）、1～3月期は、燃料小売業が原油価格の上昇によるガソリン価格や灯油価格の上昇により増加、自動車小売業が普通乗用車の新型車効果などにより増加、飲食料品小売業が野菜の相場高などにより増加したほか、すべての業種で増加したことにより、33兆9230億円、前年同期比1.8%と2期連続の増加となった。

4～6月期は、各種商品小売業、織物・衣服・身の回り品小売業が天候不順の影響により季節商材が不調だったことにより減少したものの、飲食料品小売業が畜産品や飲料、米などに動きがみられたことにより増加、燃料小売業が原油価格の上昇による石油製品価格の上昇により増加、自動車小売業が普通乗用車の新型車効果などから増加したことにより、33兆2110億円、同0.2%の増加となった。

7～9月期は、各種商品小売業、織物・衣服・身の回り品小売業が天候不順の影響により、衣料品を中心とした季節商材が不調だったことなどにより減少したものの、飲食料品小売業が畜産品や米などに動きがみられたことなどにより増加、機械器具小売業が薄型テレビや冷蔵庫などが堅調だったことなどにより増加、燃料小売業が原油価格の上昇などによる石油製品価格の上昇により増加したことにより、33兆2220億円、同0.8%の増加となった。

10～12月期は飲食料品小売業を除くすべての業種が減少したことにより、35兆1210億円、同1.5%と5期ぶりの減少となった。

### 1. 業種別の動向

各種商品小売業は、飲食料品や化粧品に動きがみられたものの、衣料品が年間を通して天候不順などの影響から季節衣料が伸び悩んだことなどにより、15兆7780億円、前年比2.5%と13年連続の減少となった。

四半期別にみると、1～3月期は、1月から3月初旬にかけて気温が低く推移したことから春物衣料が不振だったものの、うるう年効果に加え、飲食料品が好調だったことなどにより前年同期比0.1%と3期ぶりの増加となった。4～6月期は、飲食料品は好調だったものの、前年は6月末にスタートしたクリアランスセールが7月となった反動に加え、天候不順による初夏・夏物衣料が不振だったことなどにより、同2.6%と2期ぶりの減少となった。7～9月期は、飲食料品は堅調だったものの、天候不順による季節商材が不調だったことや高額商品が不振だったことなどにより、同1.7%の減少となった。10～12月期は、飲食料品は堅調だったものの、重衣料の不振に加え、引き続き高額商品の売れ行きが不振だったことなどにより、同5.5%の減少となった。

織物・衣服・身の回り品小売業は、年間を通して天候不順などの影響から季節衣料が伸び悩んだことなどにより、10兆4670億円、前年比1.5%と4年連続の減少となった。

四半期別にみると、1～3月期は、1月から3月初旬にかけて気温が低く推移したことから冬物商材に動

きがみられたことに加え、うるう年効果などにより、前年同期比 0.5%と10期ぶりの増加となった。4～6月期は、天候不順による初夏・夏物衣料が不振だったことなどにより、同 2.2%と2期ぶりの減少となった。7～9月期は、天候不順による季節商材が不振だったことなどにより、同 1.4%の減少となった。10～12月期は、秋・冬物衣料の動きが鈍かったことなどにより、同 2.8%の減少となった。

飲食料品小売業は、畜産品や米などに動きがみられたことなどにより、41兆7810億円、前年比2.5%と2年連続の増加となった。

四半期別にみると、1～3月期は、野菜の相場高に加え、鍋物商材が好調だったことにより、前年同期比1.0%と2期連続の増加となった。4～6月期は、畜産品に加え、飲料や米などが好調だったことにより、同2.4%の増加となった。7～9月期は、畜産品や米などに動きがみられたことなどにより、同2.6%の増加となった。10～12月期は、家庭における節約志向による外食から内食化へシフトする傾向が高まり、畜産品や米、鍋物商材が好調だったことなどにより、同3.8%の増加となった。

自動車小売業は、年前半まで普通乗用車などが好調だったことなどにより、15兆1670億円、前年比0.1%と3年ぶりの増加となった。

四半期別にみると、小型乗用車や軽乗用車が苦戦したものの、普通乗用車が新型車効果などから好調に推移したことにより、1～3月期は、前年同期比3.5%と2期連続の増加、4～6月期は、同1.2%の増加となった。7～9月期、10～12月期は、普通乗用車や小型乗用車が不振だったことなどにより、それぞれ同0.3%、同4.3%の減少となった。

機械器具小売業は、薄型テレビや電気冷蔵庫などが好調だったことなどにより、7兆6450億円、前年比0.2%と4年ぶりの増加となった。

四半期別にみると、1～3月期は、薄型テレビなどが堅調だったことにより、前年同期比0.4%と2期連続の増加となった。4～6月期、7～9月期は、薄型テレビや冷蔵庫などが堅調だったことにより、それぞれ同0.1%、同2.9%の増加となった。10～12月期は、薄型テレビの伸びが鈍化したことに加え、エアコンや電気洗濯機などが減少したことにより、同2.6%と5期ぶりの減少となった。

燃料小売業は、年前半の原油価格の上昇による石油製品価格の値上がりなどにより、14兆2960億円、前年比0.5%と2年ぶりの増加となった。

四半期別にみると、1～3月期は、原油価格の上昇によるガソリン価格や灯油価格の上昇などにより前年同期比8.1%と4期連続の増加となった。4～6月期、7～9月期は、原油価格の上昇による石油製品価格の上昇などにより、それぞれ同2.5%、同0.5%の増加となった。10～12月期は、ガソリンや灯油など石油製品価格の値下がりなどにより、同8.5%と7期ぶりの減少となった。

その他小売業は、年間を通してペット用品などに堅調な動きがみられたものの、昨年のゲーム機関連の反動減に加え、医薬品なども低調だったことなどにより、30兆3430億円、前年比0.5%と4年ぶりの減少となった。

四半期別にみると、1～3月期は、化粧品や風邪薬、花粉症対策関連商材などの堅調な動きに加え、ペット用品などが好調だったことにより、前年同期比0.4%と12期連続の増加となった。4～6月期は、化粧品などが好調だったものの、昨年好調だったゲーム機販売の反動などにより、同1.8%と13期ぶりの減少となった。7～9月期は、化粧品やペットフードなどが堅調だったことなどにより同0.5%の増加となった。10～12月期は、期を通じて化粧品、ペット用品などに堅調な動きがみられたものの、昨年のゲーム機関連の反動減などにより、同1.0%の減少となった。

## 2. 大型小売店の動向

小売業販売額の約15%を占める大型小売店の販売額は、20兆9511億円、前年比1.2%と2年ぶりの減少となった(第4図)。

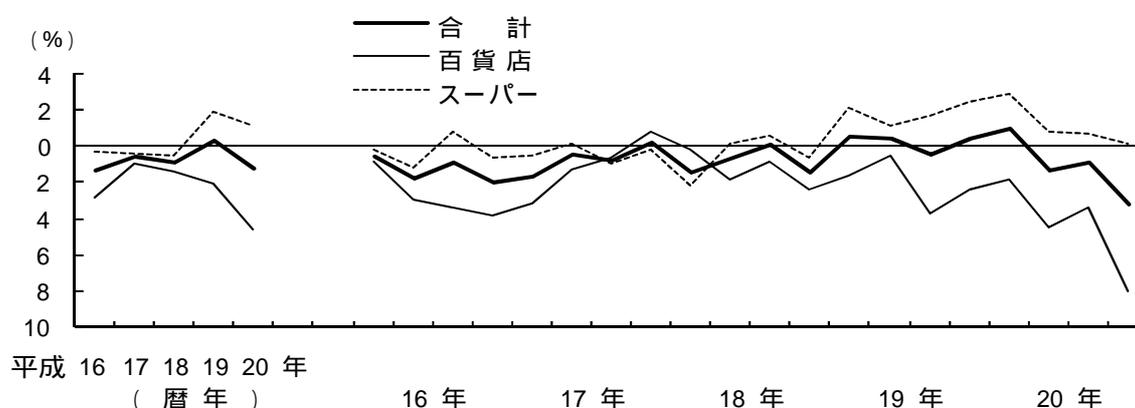
これは、年間を通して飲食料品や化粧品などに動きがみられたものの、季節衣料が伸び悩んだことなどによる。商品別にみると、衣料品は、婦人服を中心に全般的に不調だったことなどにより減少となった。飲食料品は、催事効果がみられたことやスーパーの出店効果の影響などにより増加となった。その他は、高

額商品が不調だったことなどにより減少となった。

四半期別にみると、1～3月期は、気温が低く推移したことなどの影響から季節衣料が伸び悩んだものの、うるう年効果に加え、飲食料品が好調だったことなどにより、前年同期比1.0%と2期連続の増加となった。4～6月期は、飲食料品が好調だったものの、5月から6月にかけての天候不順による初夏・夏物衣料が不調だったことに加え、昨年夏のクリアランスセールが6月末に前倒しとなった反動減などにより、同 1.3%と3期ぶりの減少となった。7～9月期は、飲食料品が堅調だったものの、7月から8月にかけての天候不順により季節商材が不調だったことに加え、宝飾品などの高額商品が不調だったことなどにより、同 0.9%と2期連続の減少となった。10～12月期は、飲食料品が鍋物商材を中心に好調だったものの、衣料品が婦人服を中心に全般的に不調だったことなどにより、同 3.2%と3期連続の減少となった。

なお、大型小売店の既存店ベースでみると、前年比 2.5%と平成4年から17年連続の減少となった。

第4図 大型小売店（百貨店・スーパー）の販売額推移（前年比・前年同期比）



## 百貨店

百貨店の販売額は、8兆787億円、前年比 4.6%と11年連続の減少となった。これは、飲食料品や化粧品に動きがみられたものの、衣料品が婦人服を中心に全般的に不調だったことなどに加え、高額商品が不調だったことなどによる。商品別にみると、衣料品は、季節衣料が天候の影響や消費者の買い控え傾向の高まりなどにより減少となった。飲食料品は、改装・催事効果などにより堅調に推移し増加となった。その他は、UV関連や新製品の化粧品は好調だったものの、高額商品など全般的に不調だったことなどにより減少となった。

四半期別にみると(第5図)、1～3月期は、うるう年効果に加え、改装や催事効果などがみられたものの、春物衣料が不振だったことに加え、宝飾品などの高額商品が不調だったことなどにより、前年同期比1.8%と9期連続の減少となった。商品別にみると、衣料品は婦人服、紳士服とも1月から3月初旬にかけて気温が低く推移したことから春物衣料が不振だったことなどにより減少となった。飲食料品は、売り場の改装やバレンタインデー及びホワイトデーを中心とした催事効果による需要が好調だったことなどから増加となった。その他は、宝飾品などの高額商品が不調だったことなどにより減少となった。

4～6月期は、改装や催事効果などがみられたものの、5月から6月にかけての天候不順による初夏・夏物衣料が不調だったことに加え、昨年夏のクリアランスセールが6月末に前倒しとなった反動減や宝飾品などの高額商品が不調だったことなどにより、同 4.5%と10期連続の減少となった。商品別にみると、衣料品は婦人服、紳士服とも気温の変動が大きかったことや多雨の影響もあって、初夏・夏物衣料が不振だったことなどにより大幅減少となった。飲食料品は、売り場の改装や物産展などの催事効果による需要が好調だったことなどから増加となった。その他は、宝飾品などの高額商品が不調だったことなどにより減少とな

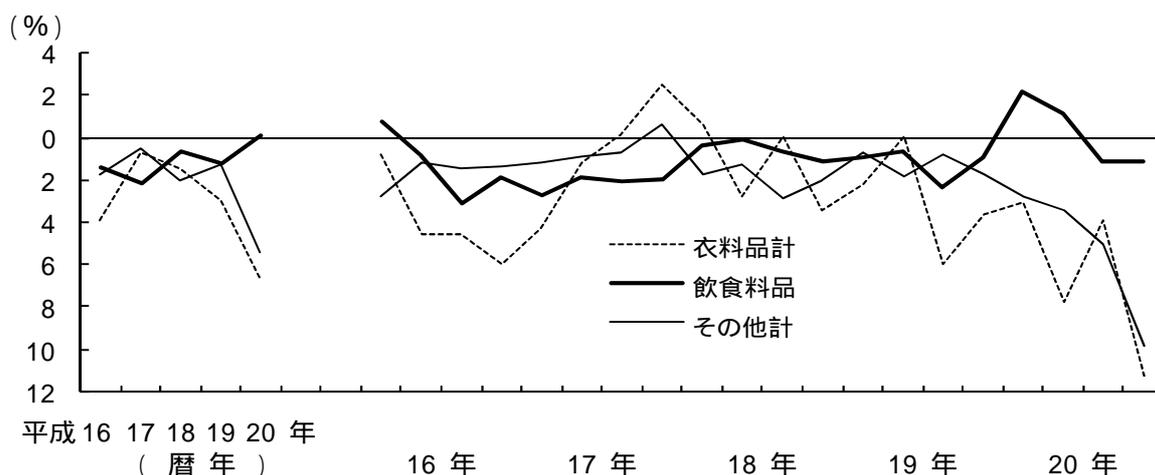
った。

7～9月期は、催事効果がみられたものの、7月から8月にかけての天候不順による季節商材が不調だったことに加え、宝飾品などの高額商品が不調だったことなどにより、同 3.4%と11期連続の減少となった。商品別にみると、衣料品は婦人服、紳士服とも気温の変動や多雨の影響もあって、夏物・秋物衣料が不振だったことなどにより大幅減少となった。飲食料品は、物産展などの催事効果による需要が好調だったものの、ギフト関連などが不調だったことなどにより減少となった。その他は、宝飾品などの高額商品が不調だったことなどにより減少となった。

10～12月期は、飲食料品に物産展などの催事効果などがみられたものの、主力の衣料品が重衣料を中心に不調だったことなどにより、同 8.0%と12期連続の減少となった。商品別にみると、衣料品は婦人服、紳士服とも重衣料を中心に不振だったことなどにより減少となった。飲食料品は、物産展などの催事効果がみられたものの、全体では伸び悩み減少となった。その他は、宝飾品などの高額商品が不調だったことなどにより減少となった。

なお、既存店ベースでみると、前年比 4.2%と12年連続の減少となった。

第5図 百貨店の商品別推移（前年比・前年同期比）



## スーパー

スーパーの販売額は、12兆8724億円、前年比1.1%と2年連続の増加となった。これは出店効果に加え、飲食料品が堅調に推移したことなどにより増加となった。

四半期別にみると(第6図)、1～3月期は、衣料品の動きが鈍かったものの、飲食料品が好調だったことなどにより、前年同期比2.9%と5期連続の増加となった。商品別にみると、衣料品は、1月から3月初旬にかけて気温が低く推移したことから春物衣料を中心に婦人服が不振だったことなどにより減少となった。飲食料品は、冷凍食品の動きが鈍かったものの、野菜の相場高に加え、寒さの影響から鍋物商材が好調に推移したことなどにより増加となった。その他は、医薬品、化粧品が堅調だったことなどにより増加となった。

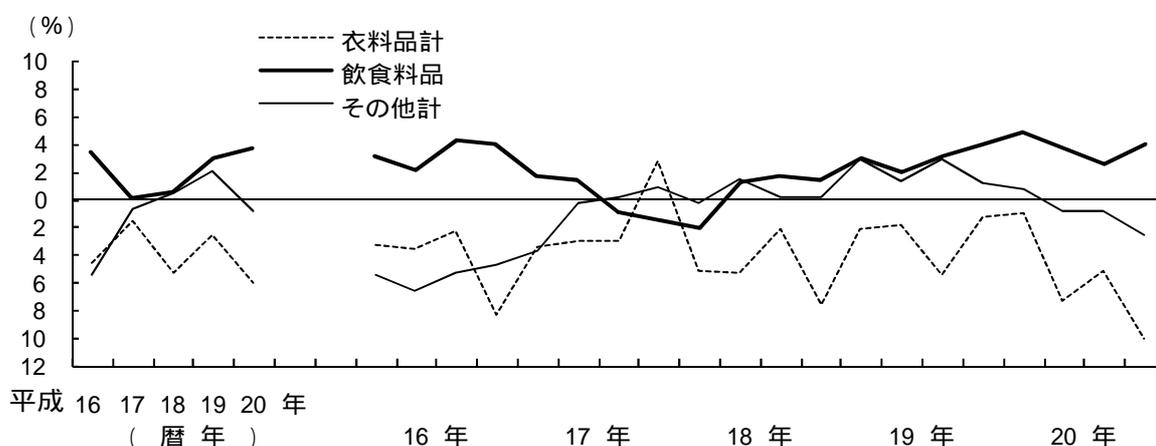
4～6月期は、衣料品の動きが鈍かったものの、飲食料品が好調だったことなどにより、同0.8%の増加となった。商品別にみると、衣料品は、気温の変動が大きかったことや多雨の影響もあって、初夏・夏物衣料が不振だったことなどにより減少となった。飲食料品は、冷凍食品の動きが鈍かったものの、飲料や調理商材が好調に推移したことなどにより増加となった。その他は、化粧品が堅調だったものの、昨年好調だったゲーム機販売の反動などにより減少となった。

7～9月期は、衣料品の動きが鈍かったものの、飲食料品が好調だったことなどにより、同 0.7%の増加となった。商品別にみると、衣料品は、天候不順の影響から夏物衣料が不振だったことなどにより減少となった。飲食料品は、飲料や野菜の動きが鈍かったものの、内食化の影響を反映し、畜産品や弁当などが堅調に推移したことなどにより増加となった。その他は、化粧品やペットフードなどが堅調だったものの、昨年好調だったゲーム機販売の反動などにより減少となった。

10～12月期は、消費者の節約志向の強まりもあり、衣料品やその他が不調だったものの、飲食料品が好調だったことなどにより、同 0.1%の増加となった。商品別にみると、衣料品は、天候の影響もあって秋・冬物衣料の動きが鈍かったことなどにより減少となった。飲食料品は、畜産品や鍋物商材などを中心に好調だったことにより増加となった。その他は、化粧品やペットフードなどが堅調だったものの、昨年好調だったゲーム機販売の反動などにより減少となった。

なお、スーパーの既存店ベースでみると、前年比 1.3%と平成4年以降、17年連続の減少となった。

第6図 スーパーの商品別推移（前年比・前年同期比）



### 3. コンビニエンスストアの動向

コンビニエンスストアの商品販売額及びサービス売上高は、3月以降、順次各地域で導入された、たばこ自動販売機用成人識別ICカード「taspo(タスポ)」の影響から、たばこの販売が好調だったことに加え、出店効果などにより、7兆9427億円、前年比6.1%と調査開始以来10年連続の増加となった(第7図)。

なお、既存店ベースでみると、同4.3%と9年ぶりの増加となった。

商品販売額は、7兆6203億円、同6.2%の増加となった。なお、既存店ベースでみると、同4.3%の増加となった。商品別にみると、ファーストフード及び日配食品は、おにぎりやパンなどが好調だったことにより、2兆7555億円、同1.7%と10年連続の増加となった。加工食品は、カップ麺やソフトドリンク、アイスクリームなどが好調だったことにより、2兆4307億円、同1.9%と4年ぶりの増加となった。非食品は、タスポ導入の影響から、たばこの販売が好調だったことなどにより、2兆4340億円、同16.9%と10年連続の増加となった。サービス売上高をみると、各種チケットなどの取り扱い増により、3224億円、同3.1%と2年連続の増加となった。なお、既存店ベースでみると、同2.8%と2年連続の増加となった。

四半期別にみると、1～3月期は、おにぎりや調理麺に加え、1月から3月初旬にかけて気温が低く推移したことから、中華まんやおでんなども好調だったほか、カップ麺、菓子類、たばこ、風邪薬、花粉症対策関連商材が伸びたことなどにより、1兆7798億円、前年同期比1.5%と6期連続の増加となった。

4～6月期は、たばこ自動販売機用成人識別ICカード「taspo(タスポ)」の導入地域拡大の影響から、たばこの販売が好調だったことに加え、おにぎり、パン、弁当、4月に気温が高かった影響からアイスクリームやソフトドリンクなどが好調だったことなどにより、1兆9224億円、同4.1%の増加となった。

7～9月期は、7月にたばこ自動販売機用成人識別ICカード「taspo(タスポ)」の導入地域が全国に広がった影響から、たばこの販売が好調だったことに加え、おにぎりやパン、7月に気温が高かった影響からアイスクリームやソフトドリンクなどが好調だったことなどにより、2兆1731億円、同9.2%の増加となった。

10～12月期は、引き続きたばこが好調だったことに加え、おにぎりやパン、ソフトドリンク、アイスクリーム、カップ麺、菓子類などが好調だったことなどにより、2兆0674億円、同8.9%の増加となった。

店舗数をみると、12月末で4万745店と前年末に比べ340店の増加(前年末比0.8%増)となった。

第7図 コンビニエンスストアの店舗数と販売額伸び率（前年比・前年同期比）

